

国
語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、14 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは**特別の指示のあるもの**のほかは、各問の ア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに**字数制限がある場合は、
、や。や**「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 入学式に向けて制服一式を調える。
- (2) 葉の上のてんとう虫を凝視する。
- (3) 約束を忠実に履行する。
- (4) 大量に仕入れた商品を廉価で販売する。
- (5) 広汎な情報を入力し対策を練る。

2 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で

書け。

- (1) 一部の例外をノゾけば物価は安定している。
- (2) 人類愛がこの作品のコンカンをなしている。
- (3) 鮮やかにゴールを決めてツウカイな気分になる。
- (4) 監督の激励の言葉にチーム全員がフンキする。
- (5) 彼が人格者であることはシユウモクの一致するところだ。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉

には、本文のあとに〔注〕がある。）

門倉修造の親友水田仙吉が三年ぶりに高松から東京に戻ってくる。中小企業の社長である門倉は水田一家のために貸家を探し、彼らがすぐさま暮らし始められるようにと準備に余念がない。

門倉は腕時計を見た。水田一家が東京駅から円タクに乗り込んだ頃あいである。こんどはどういう趣向で出迎えようか。門倉にとってこの三年は、今日のこのときのためにあったようなものだった。

「水田仙吉」の表札を見つけたのは、女房のたみだった。

地図の通り、産婆の看板のところまで円タクをおり、仙吉を先頭に、たみ、十八になる長女のさと子、すこし遅れて仙吉の父初太郎が、それぞれトランクや籐のバスケットを手に路地を入ったところで見つけたのである。たみは疲れが出たのか、汽車の中からひどく大儀そうにしていたのに、こういうことには目が早かった。

「お父さん、ほら。」

仙吉は門倉とあい年である。門倉は羽左衛門をもつとバタ臭くしたようなど言われる美男で、銀座を歩けば女は一人残らず振り返るといわれたが、仙吉のほうは、ただの一人も振り返らない男だった。見映えのない外見に重しをつけようというつもりか、鼻の下にチョビひげを蓄えている。⁽¹⁾ その分だけ分別くさく見えた。

「何様じゃあるまいし、馬鹿でかい表札出しやがって。」

嬉しい時、まず怒ってみせるのが仙吉の癖である。

「三十円にしちやいいうちじゃないの。」

「そりゃ奴がめつけたんだ。間違いないよ。」

玄関のすぐ横手に大きな木蓮がある。二つ三つ蕾がふくらんで、暗い紫色の艶のいい舌をのぞかせている。木蓮が開くと桜が咲いてお花見になるのだが、東京は高松より風が冷たい。さと子は首をすくめた。

仙吉とたまは、玄関の前で待っていた。さと子は、六年前のことを思い出した。仙台から、東京の本社へ転勤になり、今日のように門倉が借家の世話をしてくれたときのことである。あのときは、一家四人が着いたところでいきなり玄関の戸があいた。ばあと、かくれん坊の子供が出てくるように門倉の笑顔が出迎えた。今度もそうかしら、と仙吉に言う

と、

「そうだよ。なかへ入ると火鉢に火はおこってる。座布団はならんでる。

風呂は沸いている。びつくりするおれたちの顔見たくてさ。」

(2) 自分ごとのように得意になった。

「それで門倉さん、駅に迎えにこないのね。」

たみも相槌をうったが、門倉は出てこなかった。

玄関の戸は、仙吉が手をかけると、するりと開いた。

なかは仙吉の言ったとおりだった。

青畳。いま貼りかえたばかりの糊の匂いのしそうな障子と襖のまんなかに、炭火をいけた瀬戸の火鉢があった。鉄瓶がたぎり、茶の道具が揃っていた。炭取りには炭があり、部屋の隅には新しい座布団が積んである。

仙吉は、床の間の籠盛りを見つめた。鯛、伊勢海老、さざえが笹の葉

を敷いてならば、隣に「祝栄転」の熨斗紙をつけた一升瓶が立っていた。

(3) 「相変わらず下手糞だね。字だけはおれのほうがうわてだな。」

鼻のつまつたようなくぐもり声で仙吉は笑った。

押入れをあけたたみが声を立てた。

「お父さん、夜具布団、絹布よ。」

「チツキが着くまでなんだから、貸布団でいいじゃないか。無駄遣いしやがって。」

下の段には、覆いをかけた枕や寝巻まで入っていた。

間取りも申し分なかった。

茶の間が六畳、客間が八畳。つづいて夫婦の寝間の六畳。はばかりに近い玄関脇の四畳半に、煙草盆の用意があるのは、初太郎の部屋のつもりである。老父と息子の折り合いが悪く、口も利かない間柄を門倉はのみ込んでいて、夫婦の部屋と離れたところに心づもりしたのである。

二階は四畳半と納戸兼捨て部屋の三畳である。四畳半には、ここはさと子ちゃんの部屋だよというように、一輪差しに桃の花があった。

風呂場のガラスが湯気で曇っている。

仙吉は風呂桶の蓋を取り、着衣のまま手を突っ込んで、そのまま動か

なかつた。湯加減を見ているだけでないことは、さと子にもよく判った。

台所ではたみが、米櫃をあけていた。米がいっぱい入り、枡が乗っていた。たみはてのひらに米をすくい上げてはこぼしている。

(4) 「お母さん、高松のお米と東京のお米は違うの。」

さと子が声をかけたが、聞こえないのかたみは答えなかった。たみは綺麗にみえた。丸一日の船と汽車の旅のあとである。髪も衣服も乱れている。油煙のせいか首筋のあたりも薄汚れてみえる。それなのに綺麗だっ

た。いままでさと子は、母を格別綺麗だと思ったことはなかった。からだも小作りだし、色の白いだけが取柄のありきたりの顔立ちである。

なにかというとすぐムキになり、ムキになると「いい年をして、一年生が駈けっこしてるような顔」になると仙吉は言っていた。そのときの顔は好きだったが、ひとりの女として美醜を考えて見つめたことはなかった。米をすくい上げてはこぼしているたみの、目の下の盛り上がったところが、いつもよりふくらんでうす赤くなっている。急に笑ったり泣いたり、気持ちがかぶったとき、母はこういう目になる。門倉のおじさんの心遣いが嬉しいのだなとさと子は思った。

(向田邦子「あ・うん」による)

〔注〕 円タク——一円で一定距離を走る昭和初期のタクシー。

大儀そう——くたびれてだるい様子。

あい年——同じ年齢。

羽左衛門——歌舞伎俳優の市村羽左衛門。

バタ臭い——西洋風の。本文では彫りの深い顔立ちを指す。

チッキ——鉄道の乗車券を使って送る手荷物。

はばかり——便所。

油煙——汽車の煙に含まれるすず。

〔問1〕⁽¹⁾ その分だけ分別くさく見えた。とあるが、「分別くさい」の意味

に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 平凡さを隠そうと近寄りが見たい雰囲気を探らせる様子。

イ 社会的地位と経済力を鼻にかけて思い上がっている様子。

ウ ものの道理をよくわきまえていると言わんばかりな様子。

エ いかめしさを装ったことが逆に怪しい印象をかもし出す様子。

〔問2〕⁽²⁾ 自分のごとくのように得意になった。とあるが、このときの仙吉

の心情を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 門倉ほどの有能な実業家が見込んでとても大切に扱ってくれることを家族に自慢し、感謝されることを期待する気持ち。

イ 門倉が自分たち一家のために入念に準備しているであろうことを予期し、頼もしい友人をもっていることを誇らしく思う気持ち。

ウ 門倉の好意を受け入れることに慣れきっており、今回も趣向を凝らした出迎への用意が整っていることを確信し威張る気持ち。

エ 門倉がいろいろと骨を折ってくれたことを、まるで自分の手柄であるかのように振る舞い家族の注目を浴びようとする気持ち。

〔問3〕⁽³⁾「相変わらず下手糞だね。字だけはおれのほうがうわてだな。」

とあるが、この仙吉の言葉を説明したものとして最も適切なのは、

次のうちではどれか。

- ア 門倉の度を越す歓迎ぶりに自分との経済力の差を見せつけられたような引け目を感じて、過分な贈り物はかえって迷惑だと反発している。
- イ 門倉には全ての面でかなわないと思っていたが字だけはやはり自分の方がうまいと感じて、唯一勝てるものを見つけた喜びに浸っている。
- ウ 門倉のあまりに豪勢な歓迎ぶりに感嘆すると同時に平凡な勤め人である自分には分不相応であると感じて、その困惑を隠そうとしている。
- エ 門倉の祝辞に嬉しさを覚える一方で豪華な歓迎ぶりに照れくささを感じて、それを隠そうとしてわざとけなすような言い方をしている。

〔問4〕⁽⁴⁾さと子が声をかけたが、聞こえないのかたみは答えなかった。

とあるが、このときのたみの様子を説明したものとして最も適切な

なのは、次のうちではどれか。

- ア 門倉の心遣いに勇気づけられたものの明日から始まる新生活への不安はぬぐいきれず、さと子の問いかけに答えられないほど深刻に思いつめている。
- イ 門倉の心遣いに背中を押されて新生活の門出を祝うおいしい料理を作ろうと、さと子の声も耳に入らないほど献立の吟味や材料選びに熱中している。
- ウ 門倉の優しい心遣いに満ちた新居に落ち着いたことで上京の折の気疲れや緊張感から一気に解放され、さと子の存在すら目に入らないほど放心している。
- エ 門倉の温かく細やかな心遣いを新居のあちらこちらから感じとり、さと子の軽口も気にならないほどしみじみとした感謝の気持ちに浸っている。

〔問5〕 この文章の表現の工夫について説明したものととして、最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 終始一貫してさと子の冷静な視点から登場人物の心情を淡々と写すことで、強いきずなで結ばれた男同士の友情を描き出している。

イ 火鉢や木蓮などの季節の景物に登場人物の心情を託す表現を多用することで、人間の自然で細やかな情愛を生き生きと写し出している。

ウ 娘ならではのさと子の率直な視点を時折差し挟むことで、登場人物の心情がより具体的かつ身近なものとして伝わるようになっていく。

エ 家の造りや家財道具の質感の描写を随所に散りばめることで、当時の質素でつましい庶民の生活感覚や心情を浮かび上がらせている。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

三つのバケツの中の一つに、食物を隠す。その食物をチンパンジーに探させる。チンパンジーは、過去の経験から、食物は一つのバケツにしか入っていないこと、そして選択の機会は一回しかないことを知っている。この実験には、食物の隠し手と援助者——どちらも人間（実験者）である——が介入する。隠し手は、チンパンジーから食物を隠す。チンパンジーは、もちろん隠しているところを見ることはできない。しかし、援助者が、隠し手が隠すところを覗き見て（そしてそのことをチンパンジーは知っている）。食物を隠した後、援助者は、隠し場所の正しい情報を伝えるように指さす。つまり、援助者は、食物が隠されているバケツを指で示す。

さて、チンパンジーはどうするか。これは、少なくとも人間にとつては、答えを覚えてもらっているテストのようなものである。チンパンジーは、指が何をさしているのかを理解できるのだから、直ちに、正しいバケツのところに行って食物を取るだろう。と予想したいところだ。しかし、チンパンジーは、ただ闇雲にバケツを選ぶだけである。つまり、チンパンジーが正しいバケツを選ぶ確率は、三分の一であり、援助者による指さしがない場合とまったく同じだ。繰り返すが、この実験が興味深いのは、チンパンジーが、指が何をさしているかをきちんと特定できるからだ。実際、この実験で、多くの場合チンパンジーは、援助者の指が向いている先やその視線を追い、正しいバケツを見る。その後、彼（または彼女）は、これとはまったく無関係に、食物が入っているバケツを捜し

始めるのだ（そして三分の二の確率で失敗する）。トマセロは、チンパンジーがまるで次のように独り言を言っているかのようだ、と書いている。

A

チンパンジーは、指が何をさしているかは同定できる。しかし、援助者の指さしの行為が、自分の本来の目的、餌を捜すという本来の目的にとって何らかの意義をもっているということ、つまり自分にとつての関連性を理解できないのだ。

人間の子もだっただろうか。同じ課題を人間の子どもに与えたら。トマセロたちの実験によれば、たった十四ヶ月の乳幼児でも、この課題を難なくこなすことができる。つまり、援助者の指示を利用して、乳幼児は正解のバケツに確実にたどりつくのだ。まだ、ほとんど言語が出現する以前の段階の乳幼児のことである。

ここまでであれば、チンパンジーが、援助者の指示を有効に活用できなかったことに關して、いろいろな解釈が可能だ。しかし、この実験を、後に実施された改訂版の実験と比較すると、解釈は一義的なものに絞られてくる。これまでの実験を、協力的条件の下での課題と位置づける。援助者（となる人間）がチンパンジーを助けているからだ。⁽¹⁾これに加えて、トマセロたちは、競争的条件の下での実験を工夫した。今度は、人間は、競争者として介入する。まず、実験前のウォームアップ・セッションで、競争者は、チンパンジーと食物をめぐる競争する。実験に入ってから、競争者は、その争いを続けるかのようにふるまう。具体的に言えば、競争者は、——チンパンジーの方に目を向けることなく——、正しいバケツに腕を伸ばそうとする。ただし、物理的な制約があつて（ガラスに空いている穴が小さすぎて、腕が奥まで入らない）、バケツに彼の手が届かない。その後、競争者とは別のもう一人の

実験者が、三つのバケツを——正解のバケツと不正解のバケツを両方も含む——チンパンジーの手の届くところに押しやる。すると今度は、チンパンジーは、直ちに、どこに食物が隠されているかを理解し、正しいバケツを選んだのだ！

最初の協力的条件の実験と後者の競争的条件の実験では、実験者の行動の外観はよく似ている。つまり、実験者（援助者または競争者）は、身体の最も目立つ部分（指、視線、腕）を、正しいバケツの方へと向けている——けれども届いてはいない。⁽²⁾ どうして後者の実験では、チンパンジーはすぐに正解にたどり着くのに、前者の実験では、うまくいかなかったのだろうか。競争的条件の下で、チンパンジーは、そうとう複雑な推論を展開している。チンパンジーは、競争者（ライバル）が、自分と同じものを欲望していることを理解している。そして、その競争者が、（純粹に自分自身の利害から）特定のバケツに手を届かせたいと望んでいることも、チンパンジーは理解している。この二つから、チンパンジーは、バケツの中に、（チンパンジー自身にとつても価値がある）よき物が隠れているに違いない、と推理しているのである。

人間の観点からは、明らかに、協力的条件のときの方が、選択課題は簡単である。協力的条件のときには、端的に正解が指示されており、目標物に到達するために何の媒介的な推理も必要ないからだ。人間とチンパンジーとは、問題の難／易が逆転する。どうしてなのか。

チンパンジーは、他者が、何の理由もなく、自分に対して利他的に振る舞ってくれるとは想定していないからである。他者の無条件の「善意」を、チンパンジーはまったくあてにしないのだ。

逆に言えば、人間の方は、他者が無条件に「善意」をもっていることが

前提である。もう少ししていねいに言えば、この「目標物選択課題」の実験は、人間の個体が、他者に対して、二つのことを——二つのことの少なくとも一つまたは両方を——想定している。第一に、他者は、一般に、私に對して、私の利益につながるか、私にとって有意義な情報を与えてくれる。たとえ、そのことが他者にとって直接の利益をもたらさなくても。第二に、他者は、私と情報や見解を共有することを欲している。これらの想定は、実際、われわれが日々体験しているように、おおむね満たされる。たとえば、私が道に迷って困っていれば、誰かが正しい道順を教えてください。このとき、他者の有用な情報提供は、私にとっては、無償の贈与を受け手に等しい。あるいは、われわれは、始終、他者と情報や感情を共有したがっている。「さわやかな天気ですね」などと、とりたてて役に立たない情報を交換するのも、そのためである。トマセロ等の目標物選択実験は、まだ言語も習得していない乳幼児でも、この二つの想定（のうち少なくともひとつ）をもっていることを示している。乳幼児は、援助者が、乳幼児本人にとって有用な情報を提供してくれているか、あるいは乳幼児と情報を共有したがっているか、どちらか（または両方）であると前提にしているのだ。

次のように言ってもよい。人間と大型類人猿では、初期状態として設定されている社会の様態が正反対なのだ、と。大型類人猿では、それは、競争的条件の下にある社会である。だから、彼らは、競争的条件の下では、ライバルの行動からただちに正解に至りつくことができたのだ。人間では、それは、協力的条件のもとにある社会である。だから、人間の乳幼児は、援助者が提供する情報を活かすことができたのだ。

³このように、人間が前提にしている〈社会〉と類人猿の「社会」は大き

く異なっていることがわかる。どちらの社会も、それぞれ、環境に適応的だと言える。ジョン・メイナードスミスとジョージ・プライスが作った用語で厳密に言い換えれば、どちらも「進化的に安定した戦略ESS」である。ESSとは、他の戦略によって侵略され、駆逐されることがない適応戦略という意味である。類人猿の集団では、互いが競争的であると想定し、行動する個体のみが生存し、繁殖することができる。逆に、人間の集団では、基本的に協力的な個体だけが生存し、繁殖する。協力的な条件の下での行動は、いかなる利益もないのに、ときには少なからぬコストがかかるのに、他者に有益な情報を提供・贈与してしまうので、個体の生存にとっては——厳密に言えばその個体の身体の中の遺伝子の増殖にとつて——不都合であるかのように思える。しかし、この行動は、トリヴァースが言う「互惠的利他主義」が成立している状態をもたらし、遺伝子の存続・増殖にも都合がよい。したがって、人間の〈社会〉も大型霊長類の「社会」も、それだけを単独で取り出したときには、理論上、十分にありうる状態であり、ここに大きな謎はない。

深い謎は、両者の間にある。われわれは、〈社会〉と「社会」とを、進化の論理によつてつなげなくてはならない。

直立二足歩行するヒトが、チンパンジーやボノボの祖先と分岐したのは、およそ七〇〇万年前のことである。その頃地球に存在していた、ヒトとチンパンジー（そしてボノボ）との共通の祖先となる種は、現在のチンパンジー（やボノボ）と似たような習性を持ち、同じような社会的行動をとっていたと考えられる。それゆえ、⁴類人猿の集団活動、つまり「社会」から人間の〈社会〉への移行が、進化を通じて実現した、ということになる。（大澤真幸「社会性」への不可解な進化」による）

〔注〕 トマセロ——アメリカの認知心理学者。

大型類人猿——ゴリラ、チンパンジー、オランウータン、ボ
ノボ等を指す。

ジョン・メイナード・スミス——イギリスの生物学者。

ジョージ・プライス——アメリカの生物学者。

コスト——費用や労力。

トリヴァース——アメリカの生物学者。

互恵——互いに利益を与え合うこと。

〔問1〕 A に当てはまるチンパンジーの独り言として最も

適切なものを、次のうちから選べ。

ア OK。バケツは三つだね。それはわかったから早く食べ物のありか
を教えてよ。

イ OK。バケツがあるね。それが何だかっていうんだ。さてと、食べ物
はどこかな。

ウ OK。そのバケツを選ばせたいんだね。でも、僕（私）はだまされ
ないぞ。

エ OK。バケツは一つしか選べないんだよね。慎重に考えて絶対に正
解を選ぼう。

〔問2〕 (1) これに加えて、トマセロたちは、競争的条件の下での実験を工

夫した。とあるが、この実験によってわかったこととして最も適
切なものを、次のうちから選べ。

ア チンパンジーは競争的条件の下であれば、他者の行動から正しい推
理を行い、利益を得ることができるということ。

イ チンパンジーは競争的条件の下であれば、他者の行動の意図を理解
し、周囲の利益を考えるようになるということ。

ウ チンパンジーは競争的条件の下であれば、他者の行動と自己の行動
を比較し、食物を手に入れることができるということ。

エ チンパンジーは競争的条件の下であれば、他者の行動の裏を読み取っ
て、自己の利益を最優先するようになるということ。

〔問3〕 (2) どうして後者の実験では、チンパンジーはすぐに正解にたどり着

くのに、前者の実験では、うまくいかなかったのだろうか。とある
が、「前者の実験では、うまくいかなかった」理由が述べられてい

る五十字以上六十字以内の一文を抜き出し、最初と最後の五字をそ
れぞれ記せ。なお、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

〔問4〕⁽³⁾ このように、人間が前提にしている〈社会〉と類人猿の「社会」

は大きく異なっていることがわかる。とあるが、どのように異なっているのか。最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 人間の〈社会〉では他者の動作の背後にある意図の読み取りを無意識のうちに行っているが、類人猿の「社会」では他者の動作の背後にある意図の読み取りは通常行わない。

イ 人間の〈社会〉では一見役に立たないように思われるものにも意味が見いだされることがあるが、類人猿の「社会」では一目で役に立つとわかるものにはか意味が見いだされない。

ウ 人間の〈社会〉では自分の利益とは無関係に他者のために行動することがあると想定されているが、類人猿の「社会」では自分と他者の利害は対立するものであると想定されている。

エ 人間の〈社会〉では何の見返りも期待しない純粹な贈与が存在するという前提が成立するが、類人猿の「社会」では贈与の背後には利己的な意図があるという前提が成立する。

〔問5〕⁽⁴⁾ 類人猿の集団活動、つまり「社会」から人間の〈社会〉への移行が、

進化を通じて実現した、ということになる。とあるが、私たちが暮らす社会は、筆者の言う意味での進化によって実現した〈社会〉であろうか。具体例を挙げながら、二百字以内でああなたの考えを書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。「などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

冬夜読書

雪擁山堂樹影深

檐鈴不動夜沈沈

閑収乱帙思疑義

一穗青燈万古心

冬夜読書

雪は山堂を擁して 樹影深し

檐鈴動かず 夜沈沈

閑かに乱帙を収めて 疑義を思ふ

一穗の青燈 万古の心

（七言絶句）

菅 茶山

菅茶山（一七四八—一八二七）、名は晋帥、茶山はその号。広島県神辺

の人です。始め京都に出て学問を修め、のちに帰郷して黄葉夕陽村舎と

いう私塾を開いて子弟を教育しました。頼山陽の父の春水の友人で、山

陽も学んだことがあります。その後、塾は藩校となつて盛んになります。

七言絶句に優れ、東の寛斎（市河世寧）、西の茶山といわれますが、地味

ながら風格の高い詩風です。

この詩は冬のある夜、静かに読書する心境をうたう深い趣の漂う詩です。前半は（A）の様子。

雪は山堂を擁して 樹影深し

雪が山の草堂に降りつもっている。擁するとは、かかえるの意。雪が山堂をかかえるというのは、草庵が深く雪に埋もれていることをいいます。

す。樹影深し、とは木の影が黒く見えること。もちろん木の上にも雪が積もっているでしょうが、この山堂の外の景は雪の白と、木の黒い影。山奥の静かな草堂の趣。

檐鈴動かず 夜沈沈

軒端につるした鈴、ことりともしない。夜がしんと更けてゆく。沈沈というのは、夜が更けるさま。宋の蘇東坡の有名な「春夜」という詩にも、「鞦韆院落夜沈沈」という句があります。

第一句、第二句を見ると、前半ではシーンとした雰囲気がかもしだされていきます。このシーンとした雰囲気の中で、一人静かに本を読んでいる作者の姿がとらえられます。

ここで、軒端の鈴が動かない、ということにより、外は（B）ことが暗示され、それが、第四句のジツと燃える燈火を描く伏線になっていることに注意してください。

閑かに乱帙を収めて 疑義を思ふ

後半は（C）の様子。しずかに乱れた書物を収めて、今読んだ本について考える。帙とは和とじの本をまとめる、今というブックケースです。机のまわりに書物をひろげて読みふけていたが、夜もしいに更けてきたので、心しずかに散らばった本を片づけ、あれこれ、疑問の点を考える。

一穂の青燈 万古の心

穂は穂のこと、燈火の形容に用います。外に風が吹かないので、部屋の中も隙間風が来ない。燭台の青い炎が、稲の穂の形をして静かに燃えている。その炎が万古の心を照らし出す心地である。今読んだ本はいずれも先哲の本です。その昔の学者の心が自分の心に通つて来るといふ意味です。

この詩でうまいのは「一穂青燈」です。古典の中の先人の心と、自分の心とが、ジツと燃える青い一つの燈火を仲立ちにして通い合う、といった感じを与えます。そこに一つ集中するものが感ぜられる、いかにも心の中にしみ入る深い趣です。勉強の詩ですが、お説教的ではなく、学問することの楽しみ喜びを、言わず語らずのうちに訴える、いわば無言の教えのような詩です。たいへん優れた勉強の詩です。

桂林莊雜詠

示諸生 其一

休道他郷多苦辛
同袍有友自相親
柴扉曉出霜如雪
君汲川流我拾薪

桂林莊雜詠 諸生に示す 其の一

広瀬 淡窓

道^いを休^やめよ 他郷^{たきやう} 苦辛多しと
同袍^{どうぼう} 友有^{ゆうあり} 自ら相親^{おのずか}しむ
柴扉^{さいひ} 曉^{あけ}に出づれば 霜^{しも} 雪の如し
君^{きみ}は川流^{せんりゅう}を汲^くめ 我^{われ}は薪^{たきぎ}を拾^{ひろ}わん
(七言絶句)

広瀬淡窓（一七八二—一八五六）、名は簡、後に建。淡窓はその号。

今の大分県日田の人です。七、八歳で『孝経』『四書』の素読を終えるといふ英才ぶりで九州各地に遊学し、博多の亀井南冥、昭陽父子に学びますが、病のため帰郷して二十四歳で塾を開きます。高野長英・大村益次郎ら門弟四千余人がその門から出たといひます。晩年、長年の子弟教育の功を認められ、幕府から士籍に列せられ、苗字帯刀を許されました。塾の学則は厳しかったそうですが、その人柄は温厚で、詩も多くは淡々とした古風のものです。

桂林莊とは、彼が二十六歳のときに建てた塾の名です。その後入門者も増え手狭になったため、近くの村に咸宜園という塾を建てたのですが、これはまだそれほど規模も大きくない塾の時代、塾生に示した詩です。

道^いを休^やめよ 他郷^{たきやう}苦辛多しと

「道」という字は言うという意味、「休」は禁止。言いなさんな、他の国に来て苦勞が多いなどは。

同袍 友有^{ゆうあり} 自ら相親^{おのずか}しむ

袍は綿入れの着物。同袍とは『詩経』にある言葉で、同じ着物をいっしょに着合うことです。よその国へ勉強しに来て苦勞が多いなどは言うな、ここには、いっしょに勉強する友達がいて仲良くなるではないか。

柴扉 曉に出づれば 霜 雪の如し、君は川流を汲め 我は薪を拾わん

柴扉とは柴の粗末な扉、枝折戸です。朝早く戸を開けて外へ出ると、霜が雪のように真つ白である。さあ、君は川の水を汲んで来たまえ、僕は薪を拾いに行くからね。朝の炊事のしたくです。

この詩は単なる勸学の詩ではありません。共同生活をしながら勉強をしていく楽しみ、喜びをうたうものです。その楽しみをなにとらえるかということが、詩人のセンスになるわけですが、淡窓は、冬の朝の炊事のしたくという一コマにとらえた。⁽²⁾これが非凡な着想なのです。

しらじら明けに庭に出てみると、真つ白に霜が降りているということ、キユツとはりつめた雰囲気が伝わってきます。だからだらしな、勉学の場の厳しい雰囲気。吐く息も白く見えることでしょう。そして、皆が分担して炊事のしたくをする。川の水を汲んでくる者もあり、薪を拾いに行く者もある、その情景の中におのずから通い合う喜びがにじみ出ます。その厳しさ辛さの中の楽しみ喜び。それにしてもうまいものです。寒さのもたらす緊張感、春の朝とか夏の朝ではなく、あえて作者が冬の朝を選んだのは、こういう効果をねらったものなのです。あるいは、先輩菅茶山の「冬の夜」からヒントを得たものかもしれません。

もう一つ、「柴扉」という言葉によって、清貧が強調されます。皆が住んでいる塾は金殿玉楼ではない、柴の枝折戸に代表される粗末な住居である。学問をするのにふさわしいのは清貧の環境なのです。

⁽³⁾ 3 こう見てくると、塾で勉強する書生を励ますものとして、実に適切な詩です。おそらく日本の勉学を詠う詩の中で、菅茶山の「冬夜読書」と並びもつとも優れた詩だと思えます。ことに後半の二句に表れた、作者の詩人としてのセンスを汲まなければいけません。

(石川忠久「新漢詩の世界」による)

〔注〕 七言絶句——一句の字数が七字の四句から成る漢詩の形。

号——本名の他に持つ風流な名。

先哲——昔の優れた思想家や学者。

苗字帯刀——苗字(姓)を持ち、刀を身につけること。

枝折戸——木の枝を並べて作った粗末な戸。

金殿玉楼——立派な御殿。

〔問1〕 問題文の空欄 (A) 及び (C) にあてはまる語の組み

合わせとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア A 夕方 C 深夜
- イ A 現在 C 過去
- ウ A 山里 C 人里
- エ A 屋外 C 室内

〔問2〕 問題文の空欄 (B) にあてはまる語句として最も適切なもの

は、次のうちではどれか。

- ア 風が吹いていない
- イ 空気が張りつめている
- ウ 夜が更けてゆく
- エ 静寂が支配している

〔問3〕⁽¹⁾ 勉強の詩ですが、お説教的ではなく、学問することの楽しみ喜び

びを、言わず語らずのうちに訴える、いわば無言の教えのような詩です。とあるが、「学問することの楽しみ喜び」を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 真冬の草堂での修行生活を通して、時のたつのも忘れるほど己の内面の疑念を晴らすことに集中すること。

イ 学問するのにふさわしい静寂の中で、時には議論を交えながら先輩の考えに耳を傾け疑問の解決に励むこと。

ウ 孤独ながらも思う存分研究に没頭できる境遇に恵まれ、新旧のあらゆる書物を一心不乱に読み続けること。

エ ひたすら書物を読みふけることができる静かな環境に身を置き、昔の優れた学者たちと心の交流をもつこと。

〔問4〕⁽²⁾ これが非凡な着想なのです。とあるが、筆者はこの詩の作者の

「非凡な着想」はどのような点にあらわれていると述べているか。その説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 日々友としのぎを削りながら学問に励むことの誇らしさを、早朝の炊事の支度という厳しく張りつめた情景に託した点。

イ 仲間と共に学問することの喜びを、四季折々の活気に満ちた朝の光景というありふれた日常の一断面に見いだした点。

ウ 塾で勉強する書生の幸せを、冬の朝の冷たい空気の緊張感と共同生活がもたらす温かな心の通い合いとの中に描いた点。

エ 勉強することの楽しさを、単に学問を究めることだけでなく仲間との共同生活で得られる人間的成長にもあると指摘した点。

〔問5〕 ③ こう見てくると、塾で勉強する書生を励ますものとして、実に

適切な詩です。とあるが、筆者がこの詩を「塾で勉強する書生を励ますものとして、実に適切な詩」と述べた理由は何か。最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 清貧の環境の中で学ぶ書生たちの暮らしに深い理解と同情を寄せつつも、冬の山堂の美しい自然描写を交えながら学問することの楽しみや喜びをさりげなく詠っているから。

イ 故郷から遠く離れた地で勉強に励む塾生の厳しい境遇や苦労に留意しつつも、それゆえにこそ育まれ深まってゆく友情や日々の学びの喜びを中心に据えて詠っているから。

ウ 他国での苦労の多い共同生活に対する愚痴や不満を厳しくたしなめつつも、その貧しい暮らしの中にこそ学問を究める者のみが味わえる最上の喜びがあると詠っているから。

エ 塾生たちが立ち働く早朝の張りつめた情景を描写しつつも、同時に古来より同様の苦労を味わってきたであろう大勢の先輩たちをしのび心通わせられるよう詠っているから。

正答表
国語

5
〔問1〕
エ
〔問2〕
ア
〔問3〕
エ
〔問4〕
ウ
〔問5〕
イ

①	5点
②	5点
③	5点
④	5点
⑤	5点

4										
〔問5〕										
す	成	よ	を	い	れ	す	私	〔問4〕	〔問3〕	〔問1〕
社	立	う	を	っ	ば	す	の	ウ	チ	イ
会	し	に	育	た	、	ん	通		ン	〔問2〕
は	て	に	み	た	高	で	う		パ	
進	い	なる	、	他	齡	教	中		ン	
化	る	。つ	や	者	者	室	学		ジ	ア
し	の	ま	が	を	に	を	校		く	
た	だ	り	て	思	席	きれ	に		ら	
へ	。そ	、	は	い	を	い	は		で	
社	の	筆	自	や	行	に	友		あ	
会	よ	者	ら	る	動	し	達		る	
で	う	が	も	行	が	て	に		。〃	
あ	に	言	そ	動	学	い	勉			
る	考	う	の	が	び	る	強			
と	え	一	恩	学	合	人	を			
言	れ	互	恵	び	い	も	教			
え	ば	恵	を	合	や	よ	え			
る	、	的	受	り	譲	く	て			
だ	私	利	け	合	り	れ	く			
ろ	た	他	る	い	合	る	れ			
う	ち	主	こ	か	い	人	る			
。〃	が	義	と	け	の	が	人			
	暮	」	が	ら	精	い	や			
	ら	が	さ	さ	神	る	乗			
					う	。〃				

A	B	C
---	---	---

⑤	10点
---	-----

④	5点
---	----

③	5点
---	----

①	5点
②	5点

3
〔問1〕
ウ
〔問2〕
イ
〔問3〕
エ
〔問4〕
エ
〔問5〕
ウ

①	5点
②	5点
③	5点
④	5点
⑤	5点

2		
〔1〕	除	
ノ	け	
ゾ	ば	
け	ば	
ば	根	
〔2〕	幹	
コ		
ン		
カ	〔3〕	痛
ン	快	
カ		
イ	〔4〕	奮
〔3〕	起	
ツ		
ウ		
カ		
イ	〔5〕	衆
〔4〕	目	
フ		
ン		
キ		
〔5〕		
シ		
ユ		
ウ		
モ		
ク		

①	2点
②	2点
③	2点
④	2点
⑤	2点

※ 1については、ひらがなでもかたかなでもよい。

1				
〔1〕	と	の	え	る
調				
え				
る				
〔2〕	ぎ	よ	う	し
凝				
視				
〔3〕	り	こ	う	
履				
行				
〔4〕	れ	ん	か	
廉				
価				
〔5〕	こ	う	は	ん
広				
汎				

①	2点
②	2点
③	2点
④	2点
⑤	2点